

五領域「環境」「言葉」を通して育まれる人間性

—トランザクショナルアナリシスに焦点をあてて—

長瀬啓子

(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科)

要 約

乳幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期であることから、将来への見通しをもって、子どもの生活の連続性を考えなければならない。人的環境として、子どもの力を引き出すとともにモデルとしての自分の態度や行動を見せることも重要である。保育者は、自分自身をどのように見てどのように発展させていくのか考えなければならないとともに、どのような言葉かけや接し方・対応をすれば子どもがさらに伸びるのか、それをどのように保護者に伝え家庭で実践してもらおうのかななどを深く考える必要がある。

本研究では、保育内容五領域の「環境」「言葉」の重要性とともに、そのねらいや内容を踏まえ、保育者が保育内容の指導を保護者におこなう際にトランザクショナルアナリシス理論を取り入れながら行うことで、保護者の子どもへの関わり方や子ども自身の心の伸びが見えることを論じる。生活の連続性からも家庭での子どもへの関りは重要であり、保育者が行う保護者への保育の指導は、現代の育児不安からくる子どもへのネグレクト等とも大きく関連するものである。子どもに関わる際の態度や言葉が、その後の子どもの人生における考え方や見方につながることも、子どもにかけられる言葉や対話の意味をさらに深めることが目的である。

キーワード：五領域、環境・言葉、トランザクショナルアナリシス、人間形成

1. はじめに

幼稚園教育要領解説(2018)には、「教育は、子供の望ましい発達を期待し、子供のもつ潜在的な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みである。特に、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている。幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。幼児は、環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こす。」「子供は信頼する大人の影響を受ける存在であり、幼児期には、信頼する大人、特に保護者の影響を強く受ける。そのため、保護者が安定した気持ちで幼児を育てていくことは、幼児の健やかな成長にとってとても重要なことである。」

「保護者の子育てに対する不安やストレスを解消し、その喜びや生きがいを取り戻して、子供のよりよい育ちを実現する方向となるよう子育ての支援を行うことが大切である。」と記されている。

保育所保育指針解説(2018)では、「子どもは、それま

での体験を基にして、環境に働きかけ、様々な環境との相互作用により発達していく。保育所保育指針においては、子どもの発達を、環境との相互作用を通して資質・能力が育まれていく過程として捉えている。すなわち、ある時点で何か『できる、できない』といったことで発達を見ようとする画一的な捉え方ではなく、それぞれの子どもの育ちゆく過程の全体を大切にしようとする考え方である。」「保育所における保育は、保護者と共に子どもを育てる営みであり、子どもの一日を通した生活を視野に入れ、保護者の気持ちに寄り添いながら家庭との連携を密にして行わなければならない。保育において乳幼児期の子どもの育ちを支えるとともに、保護者の養育する姿勢や力が発揮されるよう、保育所の特性を生かした支援が求められる。」と記されている。

文部科学省(2009)の「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」にも、「子どもの発達は、子どもが自らの経験を基にして、周囲の環境に働きかけ、環境との相互作用を通じ、豊かな心情、意欲、態度を身につけ、新たな能力を獲得する過程である」と示唆している。

五領域「環境」「言葉」を通して育まれる人間性

このように、子どもは潜在的な力を多く持った存在であり、それらを引き出すために、伸び伸びと多くの体験や経験を積み重ねることができるような環境が必要となる。この環境は、単に物や場・空間のみではなく、関わる人との相互作用も重要となる。

子どもは自分を守り、受け入れてくれる大人を信頼し、その信頼する大人に自分の存在を認めてもらいたい、愛されたい、支えられたいという気持ちをもっている。身近な大人との継続的な関わりにおいて、愛されることや大切にされることで、情緒的な絆（愛着）が深まり情緒が安定していく。

「養護と教育」の「養護」は生命の維持と情緒の安定である。ありのままの自分を受け止めてもらえることの心地よさを味わうなど、認められ、守られているという安心感は、子どもの心をのびのびとさせ、対する人間への愛や信頼感をはぐくんでいく。特に身近な大人に対する基本的な信頼感は重要であり、安心感を心の拠りどころとし、さらに行動範囲を広げ、身近な人に働きかけ、自分の世界を拡大していく。主体性や個性など、生涯にわたる人間形成の基礎を培うのである。

将来への見通しをもって、子どもの育ちや、子どもの生活の連続性を支えていくには、保護者の養育する姿勢や力が大切となるため、保育者は、子どもの一日を通した生活を視野に入れ、保護者の気持ちに寄り添いながら家庭との連携を密にしていく必要がある。そのためにも、子どもにどのように関わっていくのか、子どもにかけられる言葉や対話にはどのような働きかけがあるのかなど、エビデンスを元に考える必要がある。

2. 五領域「環境」における子どもの発達

1) 五領域「環境」

五領域は、発達の側面から、心身の健康に関する領域『健康』、人との関わりに関する領域『人間関係』、身近な環境との関わりに関する領域『環境』、言葉の獲得に関する領域『言葉』、感性と表現に関する領域『表現』の5つの領域で編成されるが、一人の人間としての基礎をつくるのであるから、身体的発達、情緒的発達、知的発達や社会性の発達など、子どもの成長における様々な側面を総合的に伸ばしていくことが重要となる。

このように、5つの領域が相互に関連を持ち、総合的に子どもたちが様々な体験や経験を積み重ねることができるように、養護と教育の一体性を元に、個々の発達状況に応じた環境の構築や、保育の内容を豊かに繰り広げ

ていく工夫が必要である。

それらを頭に置いたうえで、「環境」について論じる。

幼稚園教育要領解説（2018）には、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」と記されている。

ねらいは、「(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」である。

また、内容の取扱いでは、「幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気づき、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。」などが示されている。

このように、個々の発達状態に応じた興味や関心のある環境を構成することで、子どもはそれに関わろうとしたり、試してみたりする。そうする中で、「不思議だな」とか「面白い」「驚いた」などの感情を育み、自分というものができていくのである。

しかしながら、それら興味や関心があるものがそこにあるだけでは、子どもの心は発達しない。「こんな面白いものがあつた」と得意そうに見せたり、「これなに？」と不思議そうに見せたりした時に、大人がどのような反応を見せるかが重要である。子どもが「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わる」には、身近な大人が子どもの心に寄り添い、ともに驚いたり好奇心を持ったることが大切なのである。

2) 人的環境からの考察

五領域「環境」には、子どもの周りにある様々な事物、生き物、他者（身近な大人、保育者、子ども同士など）、自然事象・社会事象など、多様に挙げられる。子どもは、生活の中でそれらの環境の中でさまざまに関わり、直接的・具体的な体験や遊びを通して、環境との相互作用により成長発達をしていく。

その中で子どもに関わる身近な大人は、重要な環境の一つである。信頼する大人の動きや態度は、子どもの安心感の基礎であり、人生のモデルでもある。身の置き方や行動、言葉、心情、態度などのすべてが、子どもの行

動や心の発達に大きな影響を与え、子どもの人間性を形成していくのである。

多くの場合、人生最初の人との関わりは保護者との関係であり、人間が生まれて最初に経験する社会集団は、「家族」という小さな集団である。子どもにとっては、一緒に生活している大人の影響を特に強く受けることから、保護者の子どもへの関わり方は重要となる。

乳幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期である。子どもの身近にいる大人が子どもの心を受け止め、応答的なやり取りを重ねることで、身近な人や周囲の物などの環境と関わりを深め、さらに興味・関心の対象を広げ、認識力や社会性を発達させていく。子どもは、最初の人間関係となる家族から信頼関係を学び、安全基地である養育者から安心感や勇気の後ろ盾をもらいながら、探索領域を広げ、社会性をも身につけていくのである。

幼児期になると、自分とは違う人と関わり合う生活を通して、他者の存在を意識し、相手も自分も互いに違う主張や感情をもった存在であることに気づき、自己主張だけでなく自己抑制や他者を思いやる心も生まれてくる。このように、人との関係は子どもの育ちにとって重要な環境の一部であり、子どもの発達を見通した働きかけはその後の人生にも関わると言える。

3) 環境を通して行う教育の意味

環境を通して行う教育は、生活を通して、遊びを通して行われるものである。個々の子どもの発達状況に応じて環境を意図的に構成することで、子どもの持つ潜在的な可能性に働き掛け、持つ力を引き出すことにより、子どもの自我や性格などを形作り、人格形成・人間形成の基礎を培うことにつながる。子どもの潜在的な可能性は、生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用の中で体験を深めるが、遊具や用具、素材だけを用意、配置しているだけでは、子どもの持つ可能性を開かせることは難しい。

この時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのように関わったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味をもつことになる。環境を通して行う教育においては、子どもが自ら関わりたいという意欲を持ち、興味や関心を持つものに主体的に関わっていくことは何より大切なことである。子どもに押し付けたり、詰め込んだりするのではなく、遊びの中で自由に試したり楽しんだりを繰り返し、試行錯誤を経て「できた」という満足感や充実感を味わうことが重要になる。

4) 保育者のカウンセリングマインド

乳幼児期に、安心感や安定感、開放感のある環境の中で、自由に心と体を十分に働かせ、安定した情緒を育んでいくことは、その後の人生につながる。保育者との信頼関係に支えられ、見守られていることを感じることで、「自分は大切にされている」「嬉しい」といった感情を持つ。「この場は安心できる場である」「自分は自由にできる」「自分の行動に応答してくれる」などの体験を積み重ね、安心してさらに取り組めるのである。「やってみよう」とする気持ちが芽生え、意欲や挑戦する心が育まれる。試行錯誤しながら諦めずにやり遂げた達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうのである。

子どもが主体的に自ら周囲に働き掛けることにより、生命の尊さ・公共心・好奇心・探究心・自立心・協同性などの心情・意欲・態度が培われる。多様な感情を体験することで、人と関わる力や思考力、感性や表現する力などを育み、人間として、社会と関わる人として生きていくための基礎を培うことができるのである。これらができるためには、子どもの言動や表情から、今何を感じているのか、何を実現したいと思っているのかを受け止め、自分の力で試行錯誤しながら、課題を乗り越えられるようにしていくことが必要である。

保育者は子どもと向き合い、子どもの行動に温かい関心を寄せ、心の動きに応答することが求められる。子どもの発達や興味には個人差があり、それらに応じて、ゆっくりとその子どもなりの速さで主体的に環境に関わることができる時間や場が必要である。

「なぜだろう?」「きれいだね」「不思議だね」「やったね」「できたね」など、共に考え、共に喜び、共に驚くなどの心の動きに寄り添ってくれる大人がいることで、自分の力で「できた」という喜びや誇らしさ、充実感や満足感を十分に味わっていく。保育者は子どもの今の心の動きにしっかりと目を向け、寄り添い共感しながら、それを子どもの心に伝え、経験を支えていくことが求められている。

3. 「環境」をとおした「言葉」の発達

1) 五領域「言葉」

幼稚園教育要領(2018)には、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」と記されている。

五領域「環境」「言葉」を通して育まれる人間性

ねらいは、「(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」である。

保育所保育指針解説(2008)には、子どもの様々な発達の側面は0歳からの積み重ねであるとして、次のように示されている。「言葉」の獲得と人との関係性をみると、下線に示したように、人との関りが関係していることは明らかである。(下線筆者)

I. おおむね6か月未満

○あやされて声を出したり笑ったりする。○保育士等の子守歌を聴いたり、保育士等が話している方をじっと見る。○保育士等の声や眼差しやスキンシップ等を通して、喃語が育まれる。

II. おおむね6か月から1歳3か月未満

○身近な大人との関わりを通し、喃語が豊かになる。指さしやしぐさなどが現れはじめる。○保育士等に優しく語りかけられることにより、喜んで声を出したり、応えようとする。○保育士等と視線を合わせ、喃語や声、表情などを通してやり取りを喜ぶ。

III. おおむね1歳3か月から2歳未満

○指さし、身振りなどで自分の気持ちを表したり、徐々に簡単な言葉話し始める。○保育士等の話しかけややり取りの中で、声や簡単な言葉を使って自分の気持ちを表そうとする。○保育士等の話しかけや絵本を読んでもらうこと等により言葉を理解したり、言葉を使うことを楽しむ。

IV. おおむね2歳

○保育士等と触れ合い、話をしたり、言葉を通して気持ちを通わせる。○保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で簡単な言葉でのやり取りを楽しむ。○絵本などを楽しんで見たり聞いたりして言葉に親しみ、模倣を楽しんだりする。

V. おおむね3歳

○生活に必要な言葉がある程度分かり、したいこと、してほしいことを言葉で表す。○友達の話や聞いたり、保育士等に質問したりするなど興味を持った言葉や、言葉によるイメージを楽しむ。○絵本、物語、視聴覚教材などを見たり、聞いたりしてその内容や面白さを楽しむ。

VI. おおむね4歳

○自分の経験したことや思っていることを話したりして、

言葉で伝える楽しさを味わう。○様々な言葉に興味を持ち、保育士等や友達の話や聞いたり、話したりする。○絵本、物語、視聴覚教材などを見たり、聞いたりしてイメージを広げる。

VII. おおむね5歳

○自分で考えたこと経験したことを保育士等や友達に話し、伝え合うことを楽しむ。○様々な機会や場で活発に話したり、保育士等や友達の話に耳を傾ける。○絵本、物語、視聴覚教材などを見たり、聞いたりしてイメージを広げ、保育士等や友達と楽しみ合う。

VIII. おおむね6歳

○自分の経験したこと、考えたことなどを言葉で表現する。○人の話を聞いたり、身近な文字に触れたりしながら言葉への興味を広げる。○絵本、物語、視聴覚教材などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる。

以上のように、言葉の発達は、身近な人との関わりを通して次第に獲得されるものである。人との関わりでは、見つめ合ったり、うなずいたり、微笑んだり、スキンシップをしたりなど、言葉以外のものも大切である。

乳幼児期の子どもが、自分の気持ちを自分なりの表現や言葉で現したとき、身近な大人がうなずいたり、言葉で応答すると楽しくなり、さらに話そうとし、やり取りが生まれる。そのやり取りを通して、自分の思いを受け止めてくれること、共感して一緒に感情を味わってくれること、など他者と伝えあうことの喜びや気持ちを通わせることの楽しさを学んでいくのである。

2) 人的環境における言葉からの考察

子どもは、生活や遊びの中で心を揺り動かされる体験を通して、様々な思いをもつ。この思いが高まると、その気持ちを思わず口に出したり、身近な大人に気持ちを伝え、共感してもらおうと喜びを感じるようになる。自分の話を聞いてもらうことにより、自分も人の話をよく聞こうとする気持ちになる。人の話を聞き、自分の経験したことや考えたこと、楽しかったことやびっくりしたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうようになるのである。

乳幼児期はまだ、言葉で話すことが未熟であり自分の思いを十分に伝えることができず、もどかしい思いをしたり、言うことをあきらめてしまったりもする。また、少し大きくなると、初めて出会う人には不安感から話す気持ちになれないことや、緊張すると自分の思うことを言葉でうまく表現できないこともある。

このように、言葉は、いつでも誰とでも交わすことが

できるわけではない。自分を認めてもらえる温かな人間関係の中でこそ、自分の気持ちを相手に伝えようとし、言葉を交わす喜びを味わい、自分の話したことが伝わった時の嬉しさや相手の話を聞いて分かる喜びを通して、もっと話したいと思うようになる。言葉を交わす相手との間に、安心できる雰囲気や関係が成立して、初めて言葉で話そうとするのである。

乳幼児期の人との関係性は重要であり、1つ1つの体験を通じて、自分の気持ちを表現する楽しさを味わい、伝え合う中で、自分のものの見方や考え方が、確かなものになっていく。一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、継続的な信頼関係を築いていくことは重要である。子どもは、自分の気持ちに共感し、応えてくれる人がいることで、自身の気持ちを確認し、安心して表現し行動できる。

子どもの人に対する信頼感は、生活の中で互いに認め信頼し合う関わりが継続的に行われることを通して育まれ、それらは生涯にわたる人との関わり基礎となるのである。このように言葉によるやり取りの中で、子どもの心は育ちはじめ、その心の在り方を元に、その後の行動や考え方につながると考えると、この時期の関りは非常に重要なものであるといえる。

文部科学省(2009)は、「乳児は、外界への急激な環境の変化に対応し、著しい心身の発達とともに、生活のリズムの形成を始める。特に、視覚、聴覚、嗅覚などの感覚は鋭敏で、泣く、笑うなどの表情の変化や、からだの動き、「あーうー」「ばぶばぶ」といった喃語により、自分の欲求を表現する。幼児になると、子ども同士で遊ぶことなどを通じ、豊かな想像力をはぐくむとともに、自らと違う他者の存在や視点に気づき、相手の気持ちになって考えたり、時には葛藤をおぼえたりする中で、自分の感情や意志を表現しながら、協同的な学びを通じ、十分な自己の発揮と他者の受容を経験していく。こうした体験を通じ、道徳性や社会性の基盤がはぐくまれていく。」
「現在の我が国における乳幼児期の子育てを取り巻く状況については、様々な課題が指摘されている。例えば、少子化や都市化の影響から、家庭や地域において、子どもが人や自然と直接に触れあう経験が少なくなったり、保護者の養育力の低下や児童虐待の増加なども指摘されている。」と指摘している。

また、乳幼児期における子どもの発達において、重視すべき課題としては、「愛着の形成、人に対する基本的信頼感の獲得、基本的な生活習慣の形成、十分な自己の発

揮と他者の受容による自己肯定感の獲得、道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実」、などを挙げている。

3) 「言葉」の発達と人間関係の広がり

長瀬(2016)は、「6章人間関係の発達」の中で、「言葉」の発達と人間関係について示しており、個々の発達において子どもから出された関係に即時応答していくことは、相互の絆を深め、子どもが再度やってみよう、試してみようとしていくことに繋がることを示している。

例えば、新生児期は、言葉を話すことはできず泣いたりぐずったりすることで不快感や寂しさを表現するが、聴覚は早い時期から発達しており、親の話す声や言葉をしっかり聞いている。生後2~3ヶ月頃になると、クーイングが始まり、生後4ヶ月~5ヶ月頃の喃語へとつながる。クーイングや喃語は、乳児が周囲の大人とコミュニケーションをしたり、言葉を学習したりするために必要不可欠な行動である。子どもが発するクーイングや喃語に理解を示し、「そうねー。ブーブーね」「マンマだね」などの即時応答は、言葉の発達においても人間関係の基礎においても重要といえる。

一般的に、生後6ヶ月頃にはマ行の子音を発音するようになり、また、「マンマンマン」、「アウアウアウ」など母音と子音をつなげて反復すること(反復喃語)も覚える。9か月頃になると、身近な大人に自分の意思や欲求を指差しや身振りで伝えようとするなど、言葉によるコミュニケーションの芽生えが見られるようになる。また、このころからみられる社会的参照を通して、1歳ころには、周囲の人や物に対する興味や関心が深まり、探索活動が活発になっていき、「自分で見たい」、「聞きたい」、「さわりたい」といった好奇心が強まり、興味の対象を見つけると、さわったり、口に入れてみたりと、知的好奇心をもって確かめようと一生懸命になる。

1歳を過ぎると、尖指対向操作ができるようになり、対象的行為をおこなうようになる。また、自分の意思や欲求を伝えようと、初語、一語文の獲得といったように、言語理解やコミュニケーション能力も急速に発達する。それまでは、動物全てを「ワンワン」と過剰拡張していた子どもが、猫は「ニャーニャー」、犬は「ワンワン」というように、表現を使い分けるようになる。言葉が増え感情表現が豊かさを増していくなかで、自我や感情、好奇心が発達していくとともに、認知能力や他者への意識も大きく発達していくと言える。

さらに、1歳6か月を過ぎると、可逆の指さしをおこ

ない、大人の言葉を理解したうえで行動するようになり、自己意識も成立し始める。自分の思いや欲求を伝えようと、相手に向かって手を伸ばしながら声をあげたり、顔を見て笑いかけたりと、体の動きや表情、声や喃語等で働きかける。それに対して、応答的に触れ合ったり、言葉を添えて関わったりすることで、子どもは次第に相手の言っていることを理解するようになり、自分も言葉で伝えようとする意欲を高めていく。

このように、子どもの欲求に応え、語りかけながら優しく対応することにより、子どもは心地よさとともに、自分の働きかけに対する相手の応答的な行為の意味を感じ取る。安心して様々な人と関わる状況の中で、様々な感情や欲求を持ち、自ら発した自分の気持ちを汲み取ってもらい、それを言葉にして返してもらう応答的な関わりの中で、主体性を育てていく。主体として受け止められ欲求が受容される経験を積み重ねることで、更に関わりを深めたり、他の人へ関心を広げたりしながら、人と関わる力を育てていくのである。

4. トランザクショナルアナリシス(以下 TA)に焦点を当てた人間関係

1) TA とは

TAはTransactional Analysisの略であり、交流分析と訳される。フロイトの流れをくむアメリカの精神科医であるエリック・バーン(Eric Berne)により開発された、臨床心理学の分析システムであり、心理学パーソナリティ理論でもある。精神分析を土台とした人の心と行動から分析されており、コミュニケーションや生涯発達理論について示されている。円満なパーソナリティ獲得、個人が成長し変化するための体系的な心理療法でもあり、潜在能力の顕在化・自己実現にもつながる。

TAは、自身が本来持っている能力に気づき、その能力の発揮を妨げているさまざまな要因を取り除き、本当の自分の能力の可能性を実現して生きる場所にある。自己理解と自律性(気づき、自発性、親密さ)を重視しており、他人とのふれあいの中で個人の自主性と自立性の確立をおこなうものである。

保育者や保護者は、子どもにとって人との関係性や人生への向き合い方のモデルにもなることから、自己の自我状態を知り、その伸ばすべき部分や抑えるべき部分を見つめなおすことは重要である。また、自身の対人関係での気づきや、子どもに対する行動や働きかけ、言葉など、自身の言葉が他人にどのように響き、特に未熟な子

どもの心にどのように働きかけていくかを考えることは、子育てにとっての有効な理論であると考えられる。

2) 「自我状態」と子どもの発達

交流分析協会は、「TAは通常、『自我状態』『対話分析』『ストローク』『人生態度』『時間の構造化』『ゲーム』『人生脚本』という7つのジャンルから成立する」としている。この中から子どもの発達に大きく関わる「自我状態」「対話分析」「ストローク」「人生態度」について論じる。

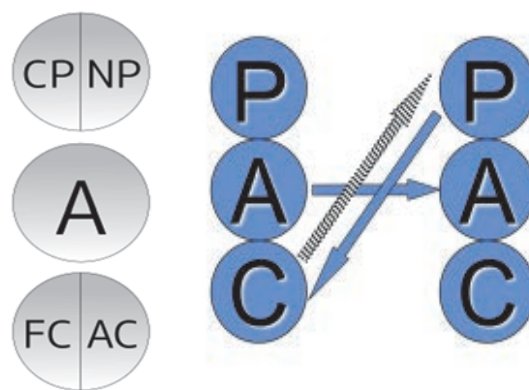
「自我状態」には、以下のようなP(Parent)、A(Adult)、C(Child)の状態があるとされている。

P(Parent):親を表す意味を持っており、人生初期に、親から受けた影響などで構成されている自我状態を示している。このPには、寛容的・保護的な親部分(母性的)(NP: Nurturing Parent)か、規範的・批判的な親部分(父性的)(CP: Critical Parent)の2つの面がある。

A(Adult):成人の意味で、事実に基づいて情報を集め、分析し、現実的に問題を解決していく状態を指している。「今-ここ」でどのようなことが起きているのかについて人々が行動し、感じ、冷静に思考する状態である。

C(Child):幼年時の心の状態を示しており、子どものように感情が自我を支配している。Cには、感情を自由に表現する自然な子どもFC(Free Child)(自然奔放)と、親の影響を強く受け、親を意識した感情的働き、依存的、他者順応な子どもAC(Adapted Child)の2つの面がある。

TAでは、人は誰でも心の中に5つのキャラクターを持っているとしており(図1)、このNP・CP・A・FC・ACの強弱とバランスを、グラフであらわしたものがエゴグラムである。この自我状態の関りが個々の子どもの中で一番良い形で表れるような子どもの頃の経験の積み重ねは重要であると示唆している。



(図1) 自我状態

(図2) 対話分析の一例

(出典:交流分析協会 <https://www.j-taa.org/ta.html>)

3) 「対話分析」「ストローク」と子どもの発達

対人関係の基本は、相手とのコミュニケーションにある。相互がどのように発し、どのように受け取るかで、コミュニケーションの善し悪しが定まるといえる。(図2) 先の自我状態において、自らの気持ちを自由に発しながら、相手の心や立場も理解し気持ちに沿った対応ができることは、人生において重要である。

交流分析協会では、「TA では、人が人に対して何かしらのエネルギーを発信することをストロークと呼び、人と人との『ふれあいや、やりとり』には、言語的なものと非言語的なもの、条件付きなもの無条件なものがあり、肯定的または否定的なものがある。」としており、杉田(1997)は「人は、肯定的なストロークが得られない状態が続くと、その代用として否定的なストロークを求める行動を取る」と指摘している。

人間は、誰にも相手にされないよりは、人に傷つけられても関りのある方を選び、そのような状況にある人は、自分を傷つける働きかけを自ら望んでいく傾向がある。

例えば、子どもが親から「できたね」とか「○○ちゃんおいで」などの肯定的なストロークをもらえないと、わざと親の嫌がることを言ったり、親から叱られるような行動をとることで、自分の存在を認めてもらおうと試みる。「できたよ。見て!」の誇らしい気持ちに対して、何も反応がない場合、スマホばかり見て自分を見てくれない場合、いつもそれが続くと自分の行動は意味がなく誇らしさも感じられなくなる。子どもは、一番身近な大人に「自分をもっと認めてもらいたい。」「視野にいれてもらいたい。」「自分自身の存在を認めてもらいたい。」と願っている。ミルクを零して「何してんの!」と叱られた。何も関心を持たれないより、否定的でも自分の存在を認めてもらう方が嬉しいと感じるのである。

子どもにとって、そのままの自分を愛し認めてもらえるストロークは自尊心を育てていくうえで大切なものであるが、子育てに不安を抱えたり、ギリギリな生活であると、保護者は否定的なストロークを発しやすいく。

そして、子どもは「ちゃんとしなさい! 片付けなさい」とガミガミ叱られる方が、生活の中で長期間無視をされるより、自分自身の存在を認められた、嬉しいと感じるのである。「私の存在を無視していない」「この場にいることをこの人は認めてくれる」これらの感情は、子どもの心の最後の砦になると言えるが、日々の生活の中で、このような応答が続けば、子ども自身の人との関係性作りにも困難が生じてくると言える。

4) 「人生態度」と子どもの発達

我々は日常生活で、自分や他人に対して、どのような態度をとっているのか、交流分析協会では、「TA では、自分および他人に対しての基本的な立場を『人生態度』という」と定義し、大きく次の4つに分類されると示している(図3)。

- ① (自己肯定・他者肯定) 私はOK, あなたもOK.
- ② (自己肯定・他者否定) 私はOK, あなたはNOT OK.
- ③ (自己否定・他者肯定) 私はNOT OK, あなたはOK.
- ④ (自己否定・他者否定) 私はNOT OK, あなたもNOT OK.

基本、私たちは日常生活で、自分または他人に対し、また何かを決定するときに、上記の4つの態度を取っているとされている。一番望ましい基本的立場は「私も、あなたもOK」であるが、いつもこの立場にあることができる人は少ない。しかし、自己否定や他者否定の状態にあったとしても、この理論を知り、少しでも自他を肯定する態度や言葉が出たならば、自他共に認めた温かい交流に繋げていけるといえる。

人生における基本的な立場は、乳幼児期からの特に、主な養育者とのふれあいの過程で形成されるものである。人的環境においてモデルとして学び取ったもの、あるいは、環境により育まれた性格は、その後の人生の基礎となる部分である。自分自身をどのようにみるのか、他者をどのように考えるのかは、子どもの人生にとって重要であり、保育者や保護者は自分自身を振り返る必要がある。



(図3) 人生態度

(出典: 交流分析協会 <https://www.j-taa.org/ta.html>)

5. 人間形成とTAとの関係性

幼児期に5領域を通して育まれる心情・意欲・態度は、小学校からその後の人生に繋がるものであり、これらは、日々の遊びや生活の中から総合的に育まれるものである。

人間は、生まれてから人とのコミュニケーションの中で、自らの態度や行動、そして人生観をつくっていく。生涯にわたる人間形成・人格形成の基礎となって、本人にとっての人生の善し悪しをつくっていくものである。

乳幼児期における養育者との安定した交流が子どもの健全な心身の成長に与える影響については、ジョン・ボウルビィ (John Bowlby)、マラー (M. Mahler)、スピッツ (A. Spitz) をはじめ、多くの学者に指摘されているところである。また、人間の一生を8つの発達段階に分けた心理学者のエリクソン (E. Erikson) は、乳幼児期の発達課題として、「基本的信頼感の獲得」を挙げている。子どもにとって、生まれて初めて出会う自分とは違う人間は母親である。これらから考えても、5領域の中でも「環境」と「言葉」はTAの概念と大いに関わるものであり、乳幼児の日常生活の中で、身近な大人がどのような関りをしているのかは重要となる。

TAからは、子どもが自分という存在を保護者からどのように扱われたか、どのようなストロークを得られたかは、子どもの心を育てる上でも重要であることが明らかとなった。乳幼児期にある子どもたちが身近な大人との関係性の中で形成した対人関係の基本的な姿勢は、成長とともに強化され自己を確定していくと考える。また、Attachment 研究からは、身近な大人からの十分な正のストロークをもらうことの重要性をみることができる。人間は自分を肯定的に認知してもらうことで人に信頼感を抱くことができる。

家庭は、生まれて初めて出会う一番最初の社会である。基本的な躰とともに、親子の無償の愛情を通して自他の尊厳・信頼感を学ぶ場でもある。そこから子どもの社会化は、始まるといってよい。子どもの主体性や社会性、挑戦する力や困難に打ち勝つ力、意欲や自分を大切にする心、人を思いやる心や感動する心、これらは、子どもを取り巻く大人の関わり方が大きく影響する。関わること、そして、その関りが子どもの心にとって正の関りであることは、重要なことと言える。

6. 子どもを取り巻く環境と社会的課題

1) 子どもと家庭を取り巻く環境変化

子どもと家庭を取り巻く環境については、我が国の社会情勢を背景に、様々な課題が拡大、顕在化している。少子化や核家族化、地域の希薄化の進行などが各省庁より指摘され、人々の価値観や生活様式も大きく変化する中で、子どもと子育て家庭における課題はさらに多様化

し複雑化している状況がある。子育てをする上で孤立感を抱いている人、子どもに関わったり世話をしたりする経験が乏しいまま親になる人、予期せぬ妊娠による出産など、育児不安・育児ノイローゼから、子どもに身体的、精神的苦痛を与えるような関わりをしてしまう保護者も増加している。

子どもは信頼する大人の影響を受ける存在であり、乳幼児期には、信頼する大人、特に保護者の影響を強く受けるため、保護者が安定した気持ちで子どもを育てていくことは、子どもの健やかな成長にとって重要となる。保護者との温かなつながりに支えられて子どもの心が安定してこそ、安心を基地に子どもは主体的に周囲の環境に関わり、意欲や積極性を育んでいくことから、保育者は家庭等と連携や協働をしながら、保育を通して、保護者に何を伝えていくかを明確にする必要があると言える。

2) 現代の子どもと社会的課題

厚生労働省 (2018) の統計では、全国の児童相談所が2017年度に対応した児童虐待の件数は133,778件 (速報値) で、過去最多を更新し、児童が死亡に至った事件では、実母による虐待が最も高く約5割に上っている。また、虐待の内容別では、「心理的虐待」が全体の54.0%を占め、「面前DV」の増加が明らかとなった。

さらに、文部科学省 (2017) の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は前年度より98,676件増加しており、特に、小学校におけるいじめの認知件数が大幅に増加していることが明らかとなった。社会的養護から見ても、子どもの施設への入所理由の背景は単純ではなく、複雑・重層化しており、虐待の背景をみても、経済的困難、両親の不仲、精神疾患、養育能力の欠如など多くの要因が絡み合っている。また、乳幼児期に育った心情・意欲・態度は、小学校の知情意へとつながり、生きる力を身につけ人生を歩んでいくはずである。しかしながら、小学校においてはいじめが増加している状況もある。このように、現代の子どもの状況としては、虐待を受けた子ども、DV被害の母子、学校でのいじめなどが増えていることが挙げられる。

人々が幸せに生活し、心穏やかな日々を送るためには、制度や政策は必要不可欠である。現代社会の状況からは、大人でさえも毎日の辛さや苦しさに耐えられず、身近な子どもにそのイライラをぶつけてしまうこともある。悲

しい時、苦しい時にどのように自分の心をコントロールし、心の平穏を取り戻すかは大切であるし、そのような人に対応した時に、どのような言葉を持てば不安を軽減させることができるのかは、大切な技術である。

子ども自身の自分を誇らしく思う気持ちや、他人を思いやる気持ちは、日々の生活から形成されるものであり、その根本となるものは、乳幼児期の身近なおとなの関りである。

3) 家庭との連携～信頼関係の構築

人の人格および人間性は、乳幼児期からの身近な大人の関りにおいて育まれる。保育者は、5 領域を元にねらいや内容が総合的に育まれるように環境構成を行い意図された計画が実践されるように、子どもへの声掛けや他児との関りを工夫している。生活は連続していることからそれらが家庭でも同じようにあることは重要である。

人的環境としての母親や父親が、どのように子どもと向かい、どのような対話をするのか、保護者自身の今がどのような状態であり、子どもへどのような対応をしがちであるかを知っているかなどは、現代の育児不安からくる子どもへのネグレクト等と大きく関連する。

子どもの発達にとって、家庭での教育と保育者が行う教育は連続していなければならず、家庭との連携を抜きにして考えることはできない。保護者が「この先生なら大丈夫」「この園なら任せられる」という安心感を感じとれるような信頼関係を、日常の触れ合いの中で築いていくことが大切である。

例えば、TA を基本とした相手を OK として認め、何でも話せる雰囲気をつくり、相手の話をゆったりと最後まで聴き、ありのままを受け止めるなどの、受容・共感・傾聴は、保護者との信頼関係（ラポール）を築くためにも有効である。また、子ども自身にも保護者自身にも、良い点や可能性が十分にあることを認識し、保護者の頑張りや認めながら情報提供を行う中で、保護者自身が主体的に選択できるように、共に考えることも重要である。

このように、「環境」「言葉」は、子どものみならず人と関わる際の基本であり、それらをどのように使用するかが大切である。身近な大人が人に対してどのような態度や言葉を使用し対応しているのか、子どもは大人をモデルとして見ているのである。

7. おわりに

交流分析協会では、TA 理論として、非言語的に伝えられるメッセージや、子どもの頃の信条や組み込まれたメ

ッセージの中に、「存在するな」「自分自身であるな」「自分の性であるな」「子供であるな」「成長するな」「成功するな」「考えるな」「感じるな」「完璧であれ！」「他人を喜ばせよ！」「努力せよ！」「強くあれ！」などのメッセージが含まれることを指摘している。

連続して浴びせられるその環境における言葉は、子どもの心を殺したり、生きやすいようにゆがんだ人生観を持つこともあり、プレッシャーに悩まされることもある。

子どもへの一言は重要である。

例えば、子どもが自分で満足できた絵を描いた場合に、それを自慢そうに見せる。その時に保育者はどのような態度や言葉かけをすれば良いかを考えると、「わあ～凄いね！」と褒めるのは、OK にあたる。しかしながら、その時に褒めず、後日その絵が賞を取り、そのことについて「わあ～賞をとって凄い！」と評価の要素が強い褒め方を続けた場合、子どもには評価された時だけ「私は OK」の枠組みが心の中にできてしまうのである。

子どもの心にとって重要なのは、存在を認められることであり、例え何かができたとしても、できなかったとしても、「あなたは大切な価値ある存在である」というメッセージを送り続けることが子どもの発達を促し、人間形成において良い環境にあるといえる。

子どもが保護者に「ねえねえ、お母さん！あのね、」と話しかけてきた時に、忙しいと無視をされたり、途中で「お母さんの言うこと聞いているの？」などと言葉を挟んだら、子どもは「言葉」で表現をしたい気持ちをなくしていく。「うんうん」「そうなん、それで？」と聞いたら子どもの話は続いていく。「〇〇ちゃんってね、優しいんだよ～」などの言葉を引き出すことができる。このように家庭に帰っても生活の中で、子どもの心を育む環境や言葉は重要である。

大人から認められたいという承認欲求や、わかってもらいたいという共感欲求が満たされることで、さらに人にかかわりたいという欲求が芽生えていく。働きかけを身近な大人から認められる嬉しさ、自分の思いを伝える楽しさ、自分でできたときの喜び、褒められたときの嬉しい気持ち、これらを通して育まれた心の交流は、さまざまな環境を通して、人とのかかわりを学んでいくことにつながる。周りに受け止められ、共感され、共有される体験が、子どもの心情、意欲、態度を育て、他者との人間関係を豊かにし、子どもの人生そのものが作られていくのである。

引用文献：

- 厚生労働省(2018)「保育所保育指針解説」ぎょうせい.
厚生労働省(2018)「平成29年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数<速報値>」ぎょうせい.
文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」ぎょうせい.
文部科学省(2009)「子どもの徳育の充実に向けた在り方について(平成21年報告)～子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」子どもの徳育に関する懇談会
文部科学省(2017)「平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(速報値)について」初等中等教育局児童生徒課
- 交流分析協会 <https://www.j-taa.org/ta.html> (2018.8)
杉田峰康著(1998)「交流分析」日本文化科学社
長瀬啓子共著(2016)「子どもと保育者でつくる人間関係」教育情報出版社, 4章, 6章

**Humanity nurtured through the "Word"
and "Environment" areas in the Five Areas
of nursery education content
—Focusing on the results from the
transactional analysis—
Keiko NAGASE**